



人間は北へ憧れる。北に住んでいても北に憧れる。北極が終着点ではない。それこそが 此性 であろう。「此性には始まりも終わりもないし、起源も目的もない。此性は点ではなく、線のみで成り立つ。此性はリゾームなのである（ドゥルーズ＝ガタリ『千のプラトー』303頁）。この展覧会は、プロジェクトのこれまでの活動を事務所で、この後会津地方で滞在活動を開始するアーティストの作品をギャラリーで紹介している。シンポジウムも開催された。福島生れの丸山芳子が主催し、毎回ゲストメンバーが入れ代わる。今回は山形在住の千葉奈穂子、フィンランドのアンツティ・ユロネンとヘレナ・ユンティラが参加した。私は原稿を書き始めた時、丸山常生と2010年にケベックへ行ったことを思い出した。パリやNYCのアートは外からどのように見られるのかを全く気にせず、自らの仕事に没頭する。今回出品したアーティストも自由気儘でありながら、自己に過酷な宿題を課して制作という格闘を行う。

ヘレナ（左上）が描く世界は独特だ。物語が進行しているようにも感じるし、極限の瞬間を切り抜いているようにも見える。それどころか、時間軸に全く寄りかかっていない発想とも読む解く事が可能だ。それは何時でもない。アンツティ（右上）は、木から大自然を見出し、徹底的に闘っている。それは彫る、削る、盛り上げる、付け足すという彫刻の技法では計りしれない、独自の追求の痕跡が伺える。それは北欧の大自然に向けられず、何処でもない。千葉（左下）の作品は図版で見ると絵画性に満ちているのだが、実物を見ると写真よりも生々しい。サイアイノタイプで和紙にプリントするとプルシャンブルーが現れるそうだ。視覚という記憶が失われていく。私は何を見るのか。丸山の近年の蛹を主題とした作品は見る者の想像力を掻き立てることよりも、見れば納得するのかという問題を提起していると私は解釈する。では私とは何者かを考える。線で成り立つ展覧会に、起源と目的があってはならない。

